

ウイグル語の心理述語

藤家洋昭 (大阪大学)

1. はじめに

本研究では、ウイグル語 (Uyghur Tili) の心理述語がどのような性質を持っているか明らかにする。ウイグル語についての伝統的な研究[1][2]においては、そもそも心理述語というカテゴリーがなく、ウイグル語の心理述語については、辞書[3]における個々の語の意味記述はあるものの、これまでほとんど記述されていない。そこで本研究では、ウイグル語の心理述語に関して、文における要素の位置、心理述語が要求する格、そして心理述語の意味構造を記述する。

2. 心理述語

心理述語とは喜怒哀楽等の人間の心理を表すもので、経験者 (experiencer) と原因 (cause) をとる。経験者とは、心理状態を体験する当人である[9]。そして原因とは心理状態をもたらすものである[9]。心理述語は日本語では、「うれしい」のような形容詞、「満足だ」のようないわゆる形容動詞、「よろこぶ」のような動詞からなるが、ウイグル語の場合、品詞的には動詞と形容詞にわかれる。

3. 基本データと考察

3.1 基本データ

ウイグル語の心理述語の例をあげる。

3.1.1 心理動詞

ensire-「心配する」, hozurlan-「楽しむ」, qorq-「恐れる」, séghin-「なつかしむ」, ümitsizlen-「失望する」, xoshal bol-「よろこぶ」

3.1.2 心理形容詞

amraq 「好きである」, öch 「嫌いである」

3.2 考察

3.2.1 経験者の位置

心理述語は、前述のように経験者と原因をとるが、これらが文中のどのような位置に現れるか、ウイグル語に関しては不明であったので以下考察する。

ウイグル語は主辞後置型の言語で、主辞後置型の言語によく見られるように、述語動詞は文末、動詞の補語等は動詞の前、形容詞などの、名詞を修飾する要素は名詞の前にくる。

心理述語と経験者の位置関係は次のようになる。

(1) Tursun kinodin hozurlandi.

トルスン(人名)・映画(奪格)・楽しんだ「トルスンは映画を楽しんだ。」

(2) Tursun u geptin qorqti.

トルスン(人名)・その・話(奪格)・恐れた「トルスンはその話をこわがった。」

(3) Tursun bala-chaqlirini séghindi.

トルスン・家族(対格)・なつかしんだ「トルスンは家族をなつかしんだ。」

このように、心理述語と経験者では、経験者が主語の位置にあるのが基本であることがわかる。ただし、経験者が目的語位置に現れることもある。

(4) Tunsunning sözi Gülnarni ümitsizlendürdi.

トルスンの・ことば・グルナル(人名)を・失望させた「トルスンのことばがグルナルを失望させた。」

cf. (5) Gülnar Tursunning sözidin ümitsizlendi.

グルナル・トルスン・ことば(奪格)・失望した「グルナルはトルスンのことばに失望した。」

しかし、すべての場合にこのような対応関係があるわけではない。4.1.1.1 を参照。

3.2.2 格

心理述語がどのような格をとるか見てみる。

(6) Tursun tatliq yémekliklerge öch.

トルスン・甘い・食べ物(与格)・嫌い「トルスンは甘いものが嫌いである。」

(7) Tursun kinodin hozurlandi. (= (1))

トルスン・映画(奪格)・楽しんだ「トルスンは映画を楽しんだ。」

(8) Tursun bala-chaqlirini séghindi. (= (3))

トルスン・家族(対格)・なつかしんだ「トルスンは家族をなつかしんだ。」

(9) Tunsunning sözi Gülnarni ümitsizlendürdi. (= (4))

トルスンの・ことば・グルナル(人名)を・失望させた「トルスンのことばがグルナルを失望させた。」

以上のように、経験者が主語の場合は、他の要素が与格、奪格、対格、経験者が目的語の場合は、経験者が対格をとることがわかった。

4. さらなるデータと分析

前章で見たデータをもとに、さらなるデータを加えながらウイグル語の心理述語を分析する。分析は、語彙主義の立場に立ち、語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure --- LCS, 以下 LCS と記す)を組み込んだ主辞駆動句構造文法の枠組みにより、語彙項目と、諸原理、諸規則の相互作用で、文が認可されると考える。また、本研究では、先行研究[6]にならい、LCS の項は、統語論的項ではなく、語彙項目が LCS とは別に持つ統語論的項の意味論的値であるとする。このため、LCS の項は、文には直接的には写像されない。統語論的項と意味論的値のリンキングについては不明な点が少なくないが、先行研究にならい、例えば、他動詞

は次のような語彙項目を持つと考える。

ARG-ST [EXT <1:3>, INT <2:4>]

LCS [3 ACT ON-5] CAUSE [BECOME [4 BE AT-6]]]

LCS には、研究者よる、あるいは、同じ研究者によるものでもバージョンによる違いがあるが、本研究では先行研究[8]にもとづき、次の基本述語を前提にしている。

CAUSE : 外的な誘因が対象物の変化を引き起こすことを表す。

ACT : 継続的あるいは一時的な「活動」を表す。主語の意思によって活動のはじめと終わりを決めることができる。

ON:ACT と一緒に用いられると働きかけの対象を示す。

BECOME : 「変化」を表す。

BE : 静止した「状態」を表す。

AT:BE と一緒に用いられて、抽象的状态、物理的位置を示す。

4.1 さらなるデータ

4.1.1 主語の種類

ウイグル語の心理述語は、経験者が基本的に主語位置に現れるが、目的語位置に現れることもあることは前章で見た。ここでは主語について考えてみる。

4.1.1.1 原因と動作主

次のデータを見られたい。

(10) Gülnar Tursundin qorqti.

グルナル(人名)・トルスン(人名)(奪格)・おそれた「グルナルはトルスンをおそれた。」

この文の経験者 Gülnar を目的語位置に置くと次のようになる。違いは、Gülnar が対格形になり、心理動詞が qorqutti「恐れさせた」という形になることである。

(11) Tursun Gülnarni qorqutti.

トルスン・グルナル(対格)・おそれさせた「トルスンはグルナルをおそれさせた。」

(10)と表面的には同じような文(12)がある。

(12) Gülnar güldürmämädin qorqti.

グルナル・雷(奪格)・おそれた「グルナルは雷をおそれた。」

この文を(11)と同じように *Gülнар* が目的語位置に現れるようにすると (13) のようになるが、(13) は非文である。

* *Güldurmama Gülnarni qorqutti.*

雷・グルナル(対格)・おそれさせた
この他に (14) も非文であることから、自然現象を表すものはこのタイプの文の主語にはなれないと考えられる。

(14) **Boran Gülnarni qorqutti.*

嵐・グルナル(対格)・おそれさせた
自然現象を表す、雷、嵐などは、自らの意思をもって動作することができない。そうすると、動作主でないものはこのタイプの文の主語になれないとすることができる。

4.1.2 原因と感情の対象

原因と感情の対象が区別されるものであることが先行研究[9]に示されている。ウイグル語において両者がどのように区別されるか見てみよう。

(15) *Tursun pologha amraq.*

トルスン・ピラフ(与格)・すきだ「トルスンはピラフが好きだ。」

この文において、仮に *polo* が原因であるとすると、*sewibidin* 「～が原因で」を用いた、対応する文が考えられる。すなわち、

(16) **Tursun polo sewibidin amraq.*

トルスン・ピラフ・が原因で・好きだ
しかし、この文は非文である。したがって、*polo* を原因とすることはできない。このことから、経験者、原因、感情の対象という枠組みでは、*polo* を感情の対象と考えざるをえない。経験者、原因、感情の対象以外の要素を想定することもありえるが、本研究の範囲を超える。

4.2 意味構造

ウイグル語の心理述語がどのような意味構造をもっているか分析する。まず、どのような意味述語が含まれるかである。ここ

では、先行研究[5][10]を参考にし、まず、STATE つまり [2 BE AT-3] が含まれるかどうかを副詞的修飾語との共起をもとに検証する。副詞的修飾語には、*nahayiti* 「非常に」を用いる。*nahayiti* は、単純な活動動詞を修飾することができない。

(17) **Tursun nahayiti küldi.*

トルスン・*nahayiti*・笑った

(18) **Tursun nahayiti yügürdi.*

トルスン・*nahayiti*・走った

ところが、本研究でとりあげた心理述語は *nahayiti* と問題なく共起することができる。

(19) *Tursun u ittin nahayiti qorqutti.*

トルスン・その・犬(奪格)・*nahayiti*・おそれた「トルスンはその犬を非常におそれた。」

(20) *Tursun nahayiti xoshal boldi.*

トルスン・*nahayiti*・よろこんだ「トルスンは非常に喜んだ。」

(21) *Men pologha nahayiti amraq.*

私・ピラフ(与格)・*nahayiti*・好きだ「私がピラフが非常に好きだ。」

したがって、ウイグル語の心理述語は単純な活動動詞ではないとすることができる。

心理動詞の意味的分析には、原因等を項ではなく付加語として扱う立場[10]があるが、本研究では、心理述語が持っている要素として、経験者、原因、感情の対象を心理述語ならでの必須要素と考えている。もし、原因、感情の対象が単なる付加語であれば、心理述語は単なる1項述語になってしまい、原因、感情の対象と経験者の意味的關係が語彙的に記述できなくなる。このため、心理述語が語彙の意味として LCS レベルで原因、感情の対象について何らかの指定をしていると考える。ただし、それがすなわち統語的項であることを意味しない。なぜなら、3.で述べたとおり、本研究で考える LCS の項は統語的項そのものではなく統語的項が持つ意味論的値であり、統

語構造には直接写像されないからである。

本研究では、先行研究[9]を参考に、原因を LCS の中に取り込み、次のようなものを仮定する。

[[¹](ACT (ON-²))] CAUSE [BECOME [² BE AT-³]]]

感情の対象ということを見ると問題が生じる。先にも述べたように、感情の対象も動詞の意味が持っていると考え。そうすると、このままの LCS では感情の対象のスロットがない。このため、LCS に感情の対象に関する意味を入れる以上、心理述語の LCS の拡張が必要になる。本研究では、感情の対象を記述するために、先行研究[7]を参考にして、"with" を用いて次のような LCS を仮定する。

[BECOME [² BE AT-³ with ⁴]] ただし、³=

心理状態 ⁴= 感情の対象
これは、² が ⁴ との関係で ³ の状態 (心理状態) になるという意味を表す。

4.3 まとめ

以上のことから、ウイグル語の心理述語は次のような語彙項目を持つと考えられる。

qorq- など

ARG-ST [EXT ¹:³, INT <>, (²abl:⁴)]

LCS [[⁴ ACT ON-²] CAUSE [BECOME [³ BE AT-⁵]]]

abl:奪格 qorq- の場合、⁵= 恐怖

séghin- など

ARG-ST [EXT ¹:³, INT ²:⁴]

LCS [BECOME [³ BE AT-⁵ with ⁴]]

séghin- の場合、⁵= なつかしい, 恋しい

amraq など

ARG-ST [EXT <>, INT ²:⁴, (³dat:⁵)]

LCS [⁴ BE AT-⁶ with ⁵]]

amraq の場合、⁶= 気に入った

5. まとめ

ウイグル語の心理述語に関して、心理述語がとる要素 (経験者、原因、感情の対象) の文中での位置、それら要素の格 (奪格、与格、対格)、そして意味構造を記述した。

参考文献

- [1] Arslan Abdulla (ed.). (2010). *Hazirqi Zaman Uyghur Tili*. Ürümchi. Shinjang Xelq Neshriyati.
- [2] Arziyev R. (2006). *Uyghur Tili*. Almuta. Mektep.
- [3] Muallim. *MP900*. Ürümchi. Muallim
- [4] Sag I. A. & Wasow T. (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction*. CSLI.
- [5] Tsujimura, N. (2001) "Degree Words and Scalar Structure in Japanese" *Lingua* 111.
- [6] 今泉志奈子・郡司隆男(2002), 「語彙的複合における複合事象」伊藤たかね(編)『文法理論:レキシコンと統語』東京大学出版会.
- [7] 影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版.
- [8] 影山太郎 (1999)『形態論と意味』くろしお出版.
- [9] 影山太郎 (編) (2001)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店.
- [10] 山川太 (2004) 「日本語における心理動詞の格表示について」『日本語・日本文化』30. 大阪大学.